

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006 ～ 2008
 課題番号：18730423
 研究課題名 (和文) 青少年における非当事者としての感情反応—その個人差と社会的意味—
 研究課題名 (英文) Adolescents' emotional responses as an observer:
 Their individual differences and social meanings
 研究代表者
 木野 和代 (KINO KAZUYO)
 広島国際大学・心理科学部・助教
 研究者番号：30389093

研究成果の概要：現代青少年の非当事者としての感情反応のうち無反応に注目し、これに関連する要因を検討した。また、他の感情反応との関連や精神的・社会的適応の観点から、無反応であることの意味を検討した。その結果、無反応であることは個人的・社会的適応において必ずしも望ましくないものである可能性が示唆された。また、無反応の低減においては、自信を高め、他者とのかかわりを増やし、他者への関心を高めていくことなどが一つの手段となる可能性が考えられた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	240,000	2,740,000

研究分野：感情心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：社会的感情, 他者事象, 社会事象, 無反応, 青少年, 個人特性, 適応

1. 研究開始当初の背景

この研究課題の背景にあるのは、青少年の感情経験の特徴を読み解くというより大きな目的であった。日本においても、10数年ほど前から情動知能の重要性が強く主張されはじめ、情動現象への関心は高まっていた。特に、過度な敵意・攻撃性との関連が予想される刑事事件や問題行動の過激化・低年齢化から、現代青少年の感情経験が注目されていた。そして、現代青少年の感情の変調に関する言及が多く見られるようになっていた(速水・丹羽, 2002; 巖倉, 2001, など)。2005

年以降「情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会」(文部科学省)においてもその現状把握と問題解決に向けた方策に関する議論が重ねられてきたとの報告がある。しかし、実証的なデータはまだ少なく、今後早急な解明作業が望まれる領域と考えられた。

また、非当事者としての感情反応の背後に仮定される「共感性」をはじめ、青少年の社会性の発達には教育界で大きなテーマであった。したがって、非当事者であることに注目した感情研究は、青少年の心の教育に関する

知見の蓄積にも貢献すると考えられた。

しかし、これまでの感情に関する心理学的研究を振り返ると、国内外を問わず、自分が当事者として関与している出来事に対する感情反応を扱ったものがほとんどであった。我々が日常生活で感じるより複雑で社会的な非当事者としての感情反応（本研究課題）は、感情を主題とする実証研究ではあまり扱われてこなかった。他者に起こった自分には直接関係のない出来事に対する感情反応（三項関係情動）を左右する状況的要因（他者との関係・出来事の重要性など）を検討した研究はあるが（山本，2005），状況要因以外にも，こうした感情反応の一般的な傾向と個人差や社会生活における影響力を検討すること（本研究課題）は，感情の社会適応的な価値を明らかにし，社会的相互作用に必要な能力育成への応用において役立つものである。本研究課題で取り扱う一連の研究により，青少年の感情理解に関する知見の蓄積・発展，ひいては社会性の発達支援・教育への応用に寄与することを目指した。

2. 研究の目的

本研究課題は，現代青少年の感情経験のなかでもとくに，他者に起こった出来事に対する感情反応，すなわち「非当事者としての感情反応」を検討するものである。

非当事者としての感情反応の分類にあたっては，山本(2005)による三項関係情動の考え方を援用して，同化的感情反応，対比的感情反応に大別し，これらに無反応を加えることとした。Hayamizu et al. (2004)による現代青年の感情経験と有能感に関する研究では，仮想的有能感の高い高校生は世間で起こる否定的事象に対して怒りや悲しみを感じるというよりも，むしろ何も感じないことがしばしばあることが報告されている。本研究ではこれらのうち特に無反応に焦点をあてることとした。

そして，他者にとって良い／悪い出来事が起こったときに，無反応となりやすい状況要因，および，この反応傾向を規定する個人的要因を検討する。また，個人内の感情変化も考慮しつつ，これらの感情反応が社会的相互作用において持つ意味を検討する。

以上の目的を達成するために，複数の研究を実施した。各研究の目的について以下に述べる。

(1) 他者事象に対する無反応に関わる有能感のあり方や認知(原因帰属)を検討する。また，無反応であることの意味をより深く把握するために，他の感情反応(同化的／対比的)との関連も検討する。

(2) 他者事象に対する無反応の背景要因を明らかにするために，無気力感や困難な事態に対する回避傾向との関連を検討する。また，

(1) 同様，他の感情反応(他者に同化的／対比的感情，複雑な気持ち)との関連も検討する。

(3) 社会事象に対する無反応と関連する対人行動の特徴および状況要因を探る。

(4) 社会事象に対する感情反応を生起させる要因を検討するために，個人特性(有能感，共感的態度，生き方)の関連を検討する。

(5) 他者事象および社会事象に対して無反応であることの意味を明らかにするために精神的健康および社会的適応との関連を検討する。

3. 研究の方法

以上の研究目的達成のために，質問紙調査および面接調査を実施した。以下に，各研究方法の概要を述べる。

(1) 他者事象に対する感情反応と有能感・原因帰属との関連

対象：大学生を対象に約5ヵ月の間隔をあけて2度の質問紙調査を実施した。両調査に回答した者は142名であった。

調査内容：第1調査では，仮想的有能感尺度第2版(Hayamizu et al., 2004)，自尊心尺度(山本他，1982)への回答を求めた。第2調査は，他者に肯定的，または，否定的事象のいずれかが起きた状況での感情反応と原因帰属をたずねるものであった。肯定的・否定的事象いずれも達成と対人関係に関するものを用意し，他者には同性で親しさの異なる2種類(親しい人／顔見知り)を設定した。

(2) 他者事象に対する感情反応と無気力感・ストレス対処との関連

対象：大学生268名を対象に質問紙調査を実施した。

調査内容：①他者に肯定的，否定的事象が起きた状況での感情反応と原因帰属などをたずねた。肯定的・否定的事象は達成場面での成功と失敗とし，他者には同性の親しさの異なる2種類(親しい人／顔見知り)を想定させた。②特定の人物に焦点をあててはいないが，多数の被災者が発生する大規模な自然災害についても同様に感情反応や事象の評価，原因帰属などをたずねた。この際，身近にこのような出来事の被災者がいるかの確認も行った。③無気力感尺度：下坂(2001)による尺度を用いた。自己不明瞭，他者不信・不満足，疲労感からなる。④ストレス対処方略：神村ら(1995)によるTAC-24を用いた。肯定的解釈，カタルシス，回避的思考，気晴らし，計画立案，情報収集，放棄・諦め，責任転嫁の8つの側面からなる。

(3) 社会事象に対する感情反応と対人行動および状況の特徴との関連

対象：大学生や大学院生等25歳未満の男女249名に質問紙調査を実施した。

調査内容：①対人行動をたずねる項目とし

て、家族や近所の人に対するあいさつの有無をたずねる項目と社会的スキル尺度（菊池（1988）による KiSS-18 を一部改変して使用）を用いた。②肯定／否定を含めニュース等で扱われた様々な事象に対する感情反応をたずねた。

(4) 社会事象に対する感情反応と有能感・共感的態度・生き方との関連

対象 大学生 222 名を対象に質問紙調査を実施した。

調査内容 ①特定の人物のみに焦点をあててはいないが、多数の被害者をだした社会事象（人災と自然災害）をとりあげ、そのニュースに対する認知的評価と感情反応をたずねた。②個人特性に関しては、仮想的有能感尺度第 2 版（Hayamizu et al., 2004）、自尊感情尺度（山本他, 1982）、孤独感の類型判別尺度（落合, 1983）、生き方尺度（板津, 1992）への回答を求めた。

(5) この他、大学生を対象に質問紙調査を行い、他者事象への無反応と精神的健康との関連を検討した（研究成果 5）。また、社会事象への無反応と親密な他者への感情との関連について検討した（研究成果 6）。

さらに、非当事者としての感情反応の社会適応的側面については、大学生等の青年を対象に自由記述調査や面接調査を実施し、社会事象に対して無反応となる理由（研究成果 7）、および、無反応であることの利点と感情反応をすることの意義、対人関係上の問題との関連の可能性を検討した（研究成果 8）。

4. 研究成果

既述のとおり、本研究課題では複数の研究を行った。これらの研究結果の概要について、上記でとりあげた順に述べる。

(1) 他者事象に対する感情反応と有能感・原因帰属との関連

無反応と有能感の関連については、顔見知りの否定的事象に対して自尊感情が低いほど無反応であった。原因帰属との関連に関しては、努力や才能／魅力など内的帰属をする場合に否定的事象に無反応な傾向があるが、肯定的事象では内的帰属をしないほど無反応であった。

また、無反応と同化・対比的感情反応の関連については、対比的感情に着目すると、肯定的事象に対してはあまり関連がないが、否定的事象に対しては全般に正の関連がみられた。無反応と同化的感情との関連の仕方もあわせて考えると、無反応であるという回答は、実際には他者に起こった出来事に対する否定的な感情反応である可能性がある。無反応とこれらの感情反応間のバランス状態や変化過程をうまく捉えた研究が必要である。

なお、状況によって無反応との関連を示す変数が異なっていた。また、無反応得点には

状況間で差異がみられた。今後はこれらの違いを説明する状況要因の考慮も必要である。(2) 他者事象に対する感情反応と無気力感・ストレス対処との関連

状況間での無反応傾向の違いを検討したところ、より親しい相手に対しては無反応となりにくいこと、自然災害に対して無反応となりにくいことがわかった。これは他の研究結果とも整合する。

次に、無反応得点と無気力感の関連について検討した。自己不明瞭であったり、他者不信・不満足なほど、親しい人の成功・失敗および自然災害など相対的に無反応傾向の低い場面に対して無反応を示しやすいことがわかった。自分自身の把握ができない感覚や他者に対する不満感が他者に対する関心を抑制している可能性が考えられる。ストレス対処方略との関連については、親しい人の成功・失敗に対して無反応な人ほど回避的思考や放棄・諦め、責任転嫁を、自然災害に対して無反応であるほど放棄・諦めや責任転嫁をする傾向があり、いずれも回避的なストレス対処方略をとりがちであることがわかった。

また、他の感情反応との関連をみると、他者の成功および失敗に対しては、無反応なほど同化的反応を抱きにくいこと、また他者の失敗に対しては、無反応なほど対比的感情を抱きやすいことが示された。無反応は実際には他者に起こった出来事に対する否定的な感情反応である可能性を支持する結果である。その一方で、自然災害に対して無反応であるほど、同化的感情、対比的感情、複雑な気持ちのいずれも抱きにくく、この状況での無反応は本来的に感情反応が生起しないことを意味している可能性もありうる。状況によって無反応の意味が異なるのかもしれない。

(3) 社会事象に対する感情反応と対人行動および状況の特徴との関連

社会事象に対して無反応であることは、社会的スキルの低さや身近な人にあいさつをしないなど、他者への行動レベルでの関与の低さと関連することが示唆された。また、状況要因については、同じ事象でも親しい人に起こった場合には無反応となりにくいこと、自然現象よりも人為的事象の方が、その中でも肯定的事象よりも否定的な方が無反応であることが示された。人為的事象は、自然現象に比べて、自発的な関与がなければ身近に起こることを想定しにくいいため、事象に対する関心が低くなりがちであるのかもしれない。

これらから、身近な人へのあいさつや社会的スキルの習得による他者との交流の活発化により、社会（他者）事象に対する関心を強めること、また、事象が自身の身に起こる可能性の認識を高めることが、社会事象への

感情反応生起につながるという過程が推測される。

(4) 社会事象に対する感情反応と有能感・共感的態度・生き方との関連

本研究では社会事象に対する「恐怖・悲しみ」「複雑な気持ち」「怒り」について検討した。事象間の感情反応得点の差異については、天災に比べて人災の方が、複雑な気持ち、怒りが強く、恐怖・悲しみが低かった。事象間の意味の違いが確認できた。

感情反応と個人特性との関連については、人間相互の理解・共感の可能性や自他共存尺度で得点が高い人の方が、また、生き方において能動的実践的態度が強い人の方が、これらの事象に対して恐怖・悲しみを喚起しやすいことがわかった。社会・他者との関わりの中で生きていく意識が高く、積極的に人生を歩む態度の強い人ほど、本人の力で統制したいことがらに対して、当事者ではなくても恐れや悲しみを抱くといえよう。自他両者に対する積極的態度の重要性が推察された。有能感とは顕著な関連がみられなかった。総じて、感情反応と個人特性との関連の仕方は2事象間で類似しており、以上の結果は多数者被害事象での感情反応の特徴といえよう。

(5) 他者事象（親しい人や知人の成功／失敗）に対する無反応と精神的健康との関連を検討したところ、親しい人の成功・失敗への無反応は生活満足感と負の関連を示した。親しい人の成功・失敗に何も感じないことは適応的な状態とはいいがたいことが示唆された。

(6) 社会事象（肯定的／否定的ニュース）に対する無反応と身近な他者に対する感情反応傾向の関連を検討した。その結果、無反応な傾向は、身近な他者に対して肯定的な感情が低いほど高かったが、否定的な感情を抱くかどうかとは関連がみられなかった。これまでの知見もあわせて考えれば、身近な他者への肯定的な関心が、より広い社会に対する反応に結びつくと考えられた。

(7) 非当事者としての感情反応の本質に接近するために、社会事象に対する非当事者としての感情反応についての考え方について面接調査を探索的に行った。社会的事象に対して無反応である理由をたずねた際の回答は、自己中心的な認知と状況に対する統制可能性のなさに集約できた。前者は Hayamizu et al. (2004) でも言及されていることである。また後者については、統制不可能であるという認知が、無力感や無気力とも結びつくことを意味している。人為的な事象のほうがより統制不可能と考えられる自然災害に比べて無反応を生み出しやすいという結果がこれまでに得られているが、その一方で、このような回答が得られたのは興味深い。例えば、地震など統制不可能で、自分の身にいつ起こるかわからないことは恐怖感などを引き起

こすと考えられるが、それが高ければ無反応となりうるという考え方であろう。感情反応における認知の役割は、従来から指摘されることであり、Weiner (1995) も注目した原因帰属（認知）が感情反応に及ぼす影響についても考慮していく必要性を意味している。

(8) 社会事象（肯定的／否定的ニュース）に対する感情反応のなさ和社会的適応との関連を検討した。社会事象に対して無感情であることの利点としては、周りに流されないことなどがあげられたが、逆に、何かを感じるものの意義としては、他者とのつながりにかかわる言及がみられた。加えて、無感情である人と親しくつき合うことを望む人の割合は低く、社会事象が否定的な内容の場合にこの傾向が強いことがみとれた。社会事象に対して無感情であることを表明することは、対人関係上、適切とはいえないことが示された。

以上、複数にわたる一連の研究結果から、他者事象および社会事象に対して無反応となりやすい状況は、親しい相手である場合よりもあまり親しくない相手に起こった出来事の場合であることがわかった。また、自然現象よりも人為的事象の方が、その中でも肯定的事象よりも否定的な方が無反応となりやすいことがわかった。

また、他者事象および社会事象への無反応に関連する個人特性としては、自信のなさ、他者の否定的事象に対する内的帰属傾向、自分自身の把握ができない感覚や他者に対する不満感、問題に対して回避的対処をとる傾向、自他両者に対する積極的態度の低さ、行動レベルでの他者への関与の低さ、身近な他者への肯定的感情の少なさがあげられた。自己の弱さと他者への非積極的態度が無反応の背景にあるように思われる。

そして、無反応であることには周りに流されないことなどの利点が考えられたが、一方で、生活満足感が低く、対人関係上も適応的とはいいがたいことが示された。他者に起こった出来事に対して感情反応を示すことは、他者との社会生活を円滑に営む上で、重要な役割を果たすと考えられる。自分自身に積極的にかかわろうとする態度を強めること、身近な人へのあいさつや社会的スキルの習得による他者との交流の活発化により他者（社会）事象に対する関心を強めること、また、これらが自身の身に起こる可能性の認識と、その場合の対処可能性の感覚を強めることが、感情反応生起につながるという過程が推測される。ただし、以上で述べた因果関係は明確なものではない。また、刺激状況によって無反応の意味が異なる可能性が考えられた。結果の解釈にあたっては、無反応が意味する内容をより正確に把握することも必要である。

本研究では無反応に焦点をあてて検討を進めてきたが、他の感情反応についてもさらに検討を進める必要がある。感情は時間の経過や認知変容により変化する複雑なものである。さらに、感情反応が対人関係に及ぼす影響に関する認識（知識）も変化過程に影響を与えていると考えられる。現段階では、感情変化のプロセスなど未分析の内容があり、今後検討を進める予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計5件)

- ① 木野和代, 他者事象に対する感情反応と無気力感・ストレス対処の関連 — 無反応に焦点をあてて —, 日本心理学会第72回大会, 2008年9月23日, 北海道大学
- ② Kino, Kazuyo Emotional irresponsiveness toward the social events and emotions for close others. XXIX International Congress of Psychology. 2008年7月23日 Berlin, Germany
- ③ 木野和代, 社会事象に対する感情反応 — 有能感・共感的態度・生き方との関連 —, 日本心理学会第71回大会, 2007年9月19日, 東洋大学
- ④ 木野和代, 社会事象に対する感情反応を左右する要因の検討 — 対人行動および事象の種類 — 日本教育心理学会第49回総会, 2007年9月17日, 文教大学
- ⑤ 木野和代, 有能感と他者事象に対する感情反応 — 他者事象に対する無関心・無感情に焦点をあてて —, 日本心理学会第70回大会, 2006年11月4日, 九州大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木野 和代 (KINO KAZUYO)

広島国際大学・心理科学部・助教

研究者番号：30389093